八朔祭古式

今年も、大変にぎやかに「お八朔」が終了しました。毎年この日を楽しみにしている方も多いことと思います。大名行列が復活してから今年で28年となり、また、早馬町を皮切りに始まった各町の屋台巡行も、復活してから約20年が経ちます。

しかし、この大名行列や祭屋台巡行が復活する以前の「八朔祭」を、皆さんはご存じでしょうか。今回は、八朔祭の起源や、江戸時代の古文書である「生出明神御祭礼定式」をもとに、江戸時代の様子をご紹介したいと思います。

八朔祭の起源

八朔祭は、もともと四日市場にある生出神社の例祭として行われたものです。これに伴って大名行列や屋台巡行が「付祭」として始められた年代については確認できませんが、天保年間（1830～40）の古文書に、「往古より供奉順行」と記されていますので、それ以前から大名行列などが行われていたことは確かなようです。一説には、郡内領主の秋元氏が川越に転封の際（1704）、行列道具一式を下天神町に置き土産として送ったことが大名行列の縁起であるとも伝えられています。

八朔祭の「八朔」とは、8月1日のことです。これを旧暦に当てはめてみると、例えば本年では、9月8日が旧暦の8月1日になります。秋の種まきも終え、稲の実り間近なこのころ、豊作を願うための祭として行われていたようです。

では、この八朔祭の古式を、古文書をもとに見てみましょう。

8月1日（旧暦）

―真夜中

昔の八朔祭は、真夜中から始まります。丑の刻（午前2時頃）になると、惣行事が太鼓を打ち鳴らし、各町を回って歩きます。これを一番太鼓といいます。

その後しばらくして二番太鼓が打ち鳴らされます。当時の若者たちは楽しみで、興奮して眠れなかったことでしょう。

―夜明け

夜明けを迎える頃、三番太鼓が鳴ります。このとき、惣行事は「お支度ー、お支度ー!!」と大声で知らせて歩きます。この合図とともに各町とも家を飛び出し、支度を整え、屋台などと共に四日市場の生出神社へ向かいます。

―朝

神社にて一通りの神事を行います。滞りなく終了すると、大手通りの御旅所に向かっていよいよ行列が始まります。

―行列開始

先頭は、榊太鼓が先触れを行います。出発の合図は、鉄砲です。

「下にぃ、下にぃ!」

いよいよ行列が出発をしました。当時は、例祭の中での行列だといっても、高いところから眺めるなど、無礼なことはできません。また、軒から突き出たもので、行列の妨げになるものは、切り落とされてしまったといいます。

○大名行列

まずは、下天神町による大名行列です。裃姿や陣羽織に身を包んだ御目付役、お役人姿の人々が、威厳をもって整然と進みます。古文書には、33役、99名が参加したと記されています。

○早馬町屋台、参加各町

大名行列のあとからは、まず、早馬町の屋台が続きます。また、ここからは、例祭に参加する各町名の入った幡をかざし、各町が続きます。

○新町屋台

続いては新町の屋台です。早馬町を始めとして、これらの屋台を彩る飾幕は、当時の贅を凝らした非常に立派なものでした。

○新井神楽

その後は、新井の神楽獅子です。笛と太鼓に合わせ、華麗に踊りながら行列を進みます。

○仲町屋台、下町屋台

この後には、2台の屋台が連続して続きます。仲町と、下町です。仲町の後幕は、鳥文斎藤原栄之、下町は画狂人北斎筆と落款が入っています。どちらも当時、名の知れた画家が下絵を描いたものです。

○四日市場神楽、花灯篭出し（山車）

ここで、また神楽獅子が舞いながら通ります。宮本である、四日市場です。宮本らしく、非常に大勢の方が囃子を演奏しています。そして、大きな花灯篭が通ります。谷村4町の屋台と同じくらいの大きさでしょうか。きれいに飾られた、大きな灯篭です。

○神輿

そしていよいよ神輿が通ります。代官所の役人と、足軽2人がまず先導し、そのあとを惣行事、世話役と通ります。神輿は、烏帽子と白装束の舎人に担がれ、威厳をもって進みます。

○神主

しんがりは、司祭者である神主が馬に乗り、そのあとに続く押さえと共に行列を締めくくります。

以上が、江戸時代の八朔祭です。祭屋台を一度四日市場まで持って行き、行列を行うなど、今では考えられませんが、江戸時代には一年に一度の「ハレ」の日だったのでしょう。

また、今回の古文書による大名行列を再現した図が、ミュージアム都留内に常時展示してあります。ぜひ一度、訪れてご覧になってください。

（参考：都留市歳時記）